

対北朝鮮、同盟軸に交渉力

日経

24.4.3

拉致・核 日米首脳会談の議題に

岸田文雄首相はバイデン米大統領との10日の会談で、北朝鮮による日本人拉致問題と核・ミサイル開発を議題にする。米韓と密接な同盟関係を維持することで北朝鮮の軍事挑発を抑止し、日朝首脳会談の実現へ交渉力につなげる。制裁は維持する一方、北朝鮮とのハイレベル対話の可能性を探る。(一面参照)

首相、挑発抑止狙う 日朝会談は実現探る

北朝鮮が意識する米國への首相の訪問前に、北朝鮮の発信が活発になっている。

2月15日に金与正(キム・ヨジョン)朝鮮労働党副部長が「拉致を障害にしないなら岸田首相の平壤訪問もあり得る」と談話を出し、金正恩(キム・ジョンウン)総書記との会談の実現をにじませた。3月25日には日本との外交交渉の経緯を明かした上で「重要なのは日本の政治決断だ」と訴

えた。26日は拉致問題の解決を主張する日本を批判し、「日本とのいかなる接触、交渉も無視し、拒否する」と表明した。

中国に駐在する北朝鮮の大使は、日本大使館の関係者が28日、北朝鮮大

使館に接触を打診してきたが、北朝鮮側が拒否したと明らかにした。

日本政府内では「日米韓の結束に揺さぶりをかけている」「北朝鮮の中央部に日本のメッセージが届いている証拠だ」といった見方がある。

日本はこれまで米國との親密な関係を北朝鮮との交渉に生かしてきた。

小泉純一郎首相はブッシュ大統領(第43代)と安倍晋三首相はトランプ大統領との関係をテコに働きかけた。18年の初めての米朝首脳会談ではトランプ氏が金正恩氏に拉致問題を提起した。

来週の日米首脳会談では北朝鮮への制裁を維持する必要性を再確認し、首相が希望する日朝首脳会談への米國側の支持をとりつきたい考えだ。

首相はかねて金正恩氏と「条件を付けず直接向き合おう」と訴えてきた。拉致被害者家族の高齢

化を踏まえ、早期にトップ会談を実現して被害者の帰国に結びつけようとするものの、弾道ミサイル発射を繰り返す北朝鮮との向き合い方は難しい。一定の配慮をみせ

日朝の最近の主な発信	
1月5日	金正恩氏が能登半島地震について岸田首相に見舞いの電報
2月15日	金与正氏の談話 拉致問題は解決済み。拉致を障害にしないなら岸田首相の平壤訪問もあり得る
16日	林官房長官の記者会見 北朝鮮談話に留意する
3月25日	金与正氏の談話 (日朝首脳会談に) 重要なのは日本の政治決断だ
25日	林氏の記者会見 拉致問題が解決されたとの主張は全く受け入れられない
26日	金与正氏の談話 日本のいかなる接触、交渉も無視し、拒否する
27日	林氏の記者会見(発言変化) 諸懸案の解決への政府方針はこれまで説明した通りだ

林芳正官房長官は3月27日の記者会見で、拉致問題を「解決済み」とする北朝鮮の主張に対し「全く受け入れられない」「全々受け入れられない」との従来の言い回しを使わなかった。「政府の方針は繰り返して説明してきた通りだ」と指摘し、一定の配慮をみせ

日本のこだわり 壁に

慶大の西野純也教授 北朝鮮の金与正(キム・ヨジョン)朝鮮労働党副部長の談話は拉致問題の解決に対するけん制だ。おそろしく日朝間でならんから接触があったが、交渉が前に進むにあたって思惑や条件が一致しない状況だと考えられる。

特に北朝鮮側は日本による拉致問題への強いこだわりが、先に進むための大きな壁と考えているのだろう。北朝鮮の立場は「解決済み」だ。

信頼関係が全くない状況では日朝首脳会談まで実現するのは難しいと言わざるを得ない。

北朝鮮問題については現在、日韓、日米韓で特に抑止の側面に重点を置きながら非常に密な連携を取っている。日朝首脳会談を推進すると日韓、日米韓関係が揺らぐことも想定される。いまの状況で会談を実現させたのであればリスクを取る覚悟も必要だ。

金与正氏談話 識者の見方

韓国・北韓大学院大の梁茂進(ヤン・ムジン)総長 金与正氏は異例の頻度で日本に関する談話を出した。日本側と進行中の接触を中断し、未来の交渉を拒否したのは2つの意味を含んでいる。

まず第一に、日本人拉致問題と核・ミサイル問題に関する日本への最後通告という位置づけだ。北朝鮮自身には交渉への未練がないことを明らかにして、相手の譲歩を引き出すという戦略だろう。拒否のトーンや日本に対する中傷が強くないので、接触の余地を残していることも考えられる。

第二に、最終的に交渉が決裂した際の責任を日本側に転嫁するための布石の意味合いもあるだろう。

日本が交渉を国内政治に利用しようとするから、これ以上は期待できない、と表明する算だ。

最後通告と責任転嫁